

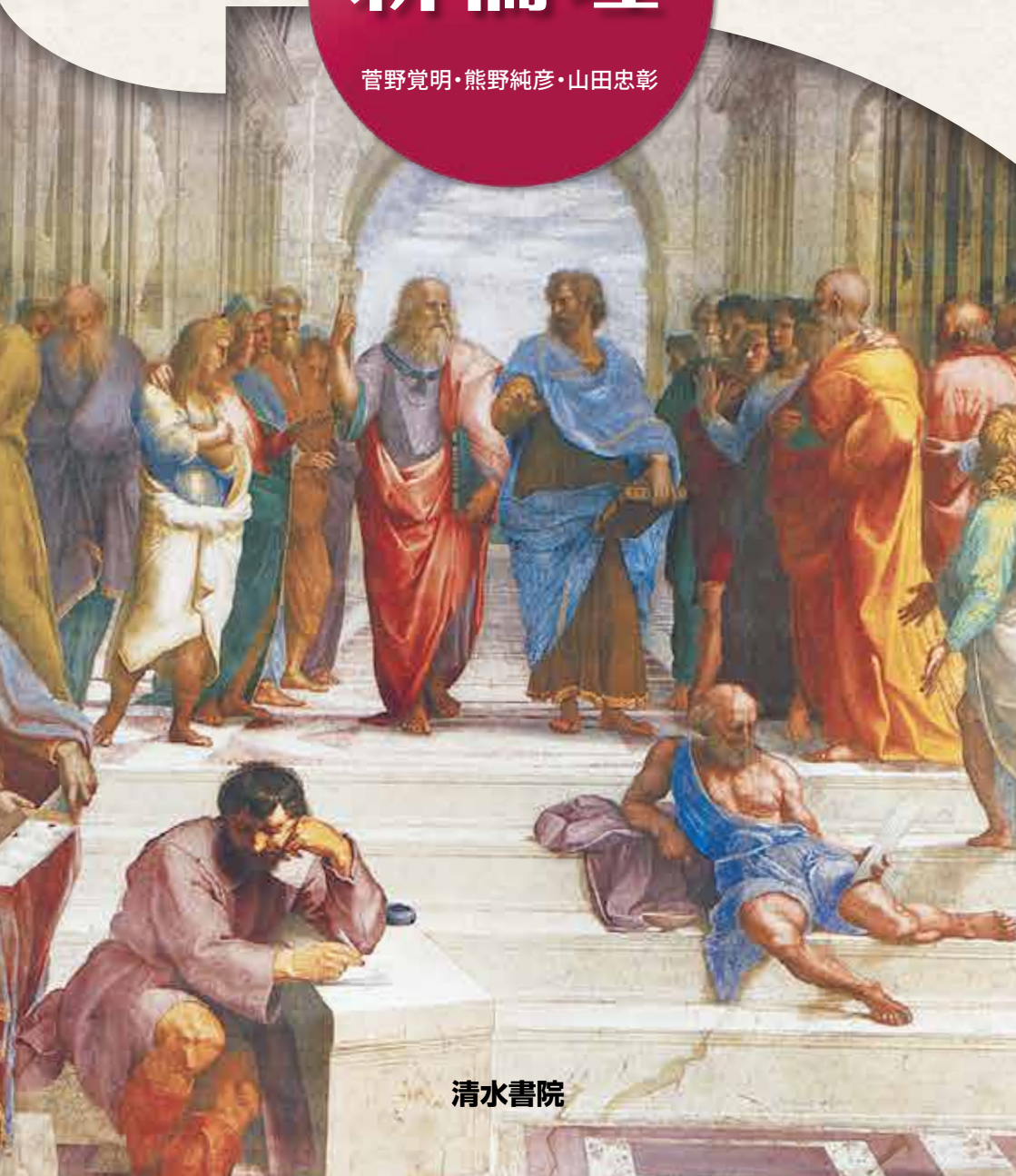
高等学校 公民科
文部科学省検定済教科書

35 清水 倫理703

Ethics
人間の探究

高等学校
新倫理

菅野覚明・熊野純彦・山田忠彰



清水書院

目次

第1編

現代を生きる
自己の課題

第2編

人間としての
自覚

第3編

現代をかたち
つくる倫理

序 人間とは何か	4
第1章 個性的な主体としての自己	
1 心の機能と個性	8
2 パーソナリティの形成と「私」	11
第2章 心と行動をめぐる探究	
1 人間の活動を支える心	13
2 認知のしくみ	16
3 生涯にわたる発達	19
第1章 哲学の始源：ギリシア思想	
1 神話から哲学へ——自然哲学者たち	24
2 知と徳をめぐる問い——ソクラテス	27
3 理想主義的なあり方——プラトン	32
4 現実主義的なあり方——アリストテレス	35
5 幸福をめぐる問い——ヘレニズムの思想	37
第2章 唯一神の宗教：キリスト教・イスラーム教	
第1節 愛の教え——キリスト教	
1 ユダヤ教	41
2 イエスの思想	43
3 世界宗教への展開	46
第2節 戒律と平等の教え——イスラーム教	51
第3章 東洋思想の源流：仏教・儒教	
第1節 智慧と慈悲の教え——仏教	
1 バラモン教	55
2 仏陀の思想	57
3 仏教とその後の展開	61
第2節 仁と礼の教え——儒教	
1 儒家の教え	65
2 儒教の展開	68
3 道家の思想	72
第4章 芸術と倫理	74
第1章 近代の成立	82
第2章 世界と人間をめぐる探究	
第1節 人間の尊厳	
1 ルネサンスとヒューマニズム	86
2 宗教改革と人間の内面	89
3 人間の偉大と限界	91
第2節 真理の認識——経験論と合理論	
1 近代科学の思考法	94
2 事実と経験の尊重——ベーコン	96
3 理性の光——デカルト	97
第3節 民主社会と倫理	
1 社会契約説と啓蒙思想	102
2 人格の尊厳と自由——カント	107
3 自己実現と自由——ヘーゲル	111
4 幸福と功利	114
5 創造的知性と幸福	116
第4節 現代社会と個人	
1 資本主義社会への批判	119
2 人間存在の地平——実存主義	121
3 世界と存在そのものへ——現象学	124

第4編
国際社会に
生きる日本人
としての自覚

4 公共性と正義129

5 社会参加と他者への奉仕135

第5節 近代の世界観・人間観の問いなおし

1 理性主義への反省 137

2 言語論的転回141

3 科学観の転換142

第1章 日本の風土と精神文化

第1節 日本人の人間観・自然観・宗教観

1 風土と日本人の生活 146

2 日本における神の観念149

3 神と仏の出会い152

第2節 日本人の仏教受容

1 古代仏教の思想 153

2 鎌倉仏教の思想158

第3節 近世社会の思想

1 儒教の伝来と朱子学 167

2 陽明学169

3 古学170

4 国学と日本文化174

5 近世庶民の思想178

6 近代的国家への道180

第2章 日本の近代化と人々の生き方

第1節 西洋近代精神の摂取

1 啓蒙思想家の活動 183

2 国家と個人の衝突185

第2節 近代的個人の自覚

1 近代的自我の成立と個人主義 189

2 社会改革の思想191

第3節 主体的な生き方と価値観の模索

1 近代日本の哲学者 194

2 近代日本の思想傾向への反省196

3 現代日本と私たちの課題198

第5編
現代における
諸課題の探究

第1章 自然や科学技術をめぐる諸課題

1 環境と倫理 202

2 生命と倫理207

3 科学技術の発展とその課題213

第2章 社会や文化にかかわる諸課題

1 文化や宗教の多様性と倫理 217

2 国際平和と人類の福祉221

思索の広場

1 対話 思考の可能性をひらく 40

2 美をめぐる判断
美と倫理とのつながり 78

3 超越的存在 東西の神 80

4 ルネサンスの神秘主義と近代科学
占星術・自然魔術・錬金術 101

5 幸福 幸福とは何か 118

6 ことば ことばとともにあること 144

7 死者の靈魂の行方
他界信仰をめぐって 165

8 時間 流れと永遠 200

9 自然 生命的自然と物質的自然 212

学習の終わりに 自己を映し出す鑑226

さくいん 227



インターネットを通じて、関連する情報にアクセスしてみよう。

<https://smz.ai/ri1>

個性的な主体としての自己



私たち人間の営みは、高度な心のはたらきに支えられている。心が生み出すさまざまな判断や行動が、一人ひとりの個性をつくり、他者とのかわり方や社会のなかで果たす役割の決定につながっていく。豊かな社会や多様な文化を生み出すのも、私たちの心のはたらきである。

この章では、心のあり方を科学的に探究してきた心理学の知見を手がかりに、私たちの心のしくみやはたらきについて学んでゆこう。

📍 スマートフォンで会話をする高校生

5

10

15

20

25

1 心の機能と個性



個性と パーソナリティ

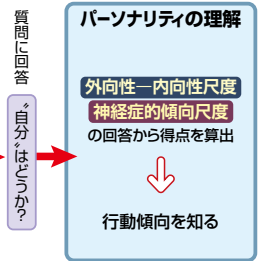
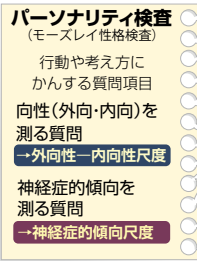
青年期には自意識が芽ばえ、自分が他者とは異なる存在であることを意識するようになる。ここから、本当の自分とは何か、という問いかけがはじまる。

「私」とは何なのか。他の人とは異なる私らしさはどこにあるのだろうか。このような問いかけをみずからに対して行うとき、人は、他者とは異なる、自分自身の考え方や価値観、行動の特徴をふり返る。これは、すなわち、他者とは区別される自分の個性を見つめ、私を形成するパーソナリティのあり方を考えることでもある。

パーソナリティとは、人間のさまざまな欲求、行動や思考傾向の総体であり、個人の「人となり」を形づくる。古代ギリシアの哲学者テオプラストスは、その著作『人さまざま』のなかで、「粗野」「へそ曲がり」「ほら吹き」など多様なタイプの人々をとりあげ、彼らの個性を、パーソナリティのちがいとして描き出している。

現代の心理学も、パーソナリティにかんする研究を通して、人間の個性について考察をすすめてきた。近年のパーソナリティ理論では、人々の豊かな個性を、いくつかの少数の型に押しこめるのではなく、行動傾向のちがいを生み出す特性の観点からとらえるという立場が主流である。

5因子	特性
神経症傾向	神経質, 不安, 抑うつ
外向性	外交的, 話好き, 活動的
開放性	創造的, 大胆, 思慮深い
調和性(協調性)	温かい, 実直, 親切
誠実性	信頼できる, 良心的, 勤勉



▲ ビッグファイブによる人格の5次元と関連する特性例

▲ アイゼンクによるパーソナリティの測定 (質問紙法)

特性論と

個人差の測定

その先駆者のひとりが、イギリスで活躍した心理学者

H. J. Eysenck
アイゼンク
1916~97

である。彼は、向性(外向・内向)や神経症

傾向(安定-不安定)が、人の行動傾向を特徴づける基本的な特性であるとして、これらの特性を反映した行動をとる度合いを調べることで、その人のパーソナリティを把握できると考えた。このように、いくつかの特性の組み合わせによってパーソナリティが構成されるとする考え方を、特性論とよぶ。

特性論では、パーソナリティを表現する基本的な特性のまとまりを見いだすことが重要になる。現代の代表的な特性論であるビッグファイブ(5因子モデル)は、性格を、神経症傾向・外向性・開放性・調和性(または協調性)・誠実性の5つのまとまり(因子)によって、とらえようとしている。

類型論

パーソナリティを行動傾向の差異としてとらえる特性論に対して、テオプラストスのように、人々をいくつかの典型的な類型に分けてとらえる考え方を、類型論という。たとえば、スイスの精神科医ユングは、人の心的エネルギーが向かう方向によって、性格を内向型、外向型の二つに分けた。内向型の人に関心が自己の内面に向き、さまざまなことを自分とのかかわりで考えようとするのに対して、外向型の人には外部の世界に関心が向き、自分の行動を判断する基準が自分の外にある。

類型論は、パーソナリティを直感的に把握し、異なる類型を比較するには便利である。しかし、典型的な型に当てはめてしまうことで、類型には関連しない、その人の重要な特性を見のがすことにもつながるなど、問題もある。

特性論において、個人差はどのように測定されるのだろうか。よく用いられるのは、「物事を心配しがちだ」「あまりしゃべらない」というような、心の状態や行動にかんする複数の項目からなる尺度を示し、各項目に対して、自分がどの程度当てはまるかを答えさせる方法(質問紙法)である。



社会的発達と愛着

人間は生まれたときから、社会的な動物として、保護者とのあいだに強い絆きずなを形成する。赤ちゃんは概して親から離されることを嫌がるし、見知らぬ人が近づくと、親にしっかりと抱きついたりする。このような他者との情動的な絆や、無条件の信頼関係は、愛着とよばれる。

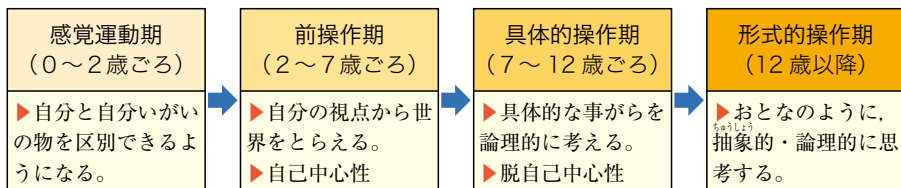
アメリカの心理学者エリクソンE. H. Erikson 1901~80は、幼少期に安定的な愛着関係を築くことが、世界は予測可能で信頼できるという基本的信頼感の獲得に重要であると考えている。幼少期の愛着形成が、成人期の人間関係において、愛情や親密さを経験するための基盤となるのである。

認知の発達

スイスの心理学者ピアジェJ. Piaget 1896~1980は、乳児期から子ども時代の認知能力の発達にかんする理論を提唱した。ピアジェは、子どもが外界との相互作用のなかで、世界にかんする理解をつくりあげていくと考えており、発達段階を大きく、感覚運動期、前操作期、具体的操作期、形式的操作期の4段階に分けて、その特徴を議論している。

出生から2歳ごろまでの感覚運動期では、見る、触る、口に入れるなど、感覚と運動による外界との相互作用にもとづき、認識を形成していく。目の前のおもちゃが布で隠されるなどして、直接見えなくなっても、それが存在しつづけるという、対象の永続性を理解するのも、この時期である。

2歳児ごろから幼児期の終わりの6~7歳ごろまでは、前操作期とよばれる。この時期には、ことばの理解がすすむとともに、ものごとを他のものに置き換えて表現する象徴機能しやうちゆうも発達し、自分や他者を別のものに見立てる想像力を使った「ごっこ遊び」を行うようになる。一方、他者の視点に立つことができなかったり、思考が自己中心的であるという特徴ももつ。



▲ ピアジェの発達理論



ある日、マクシは、チョコレートとだなを緑の戸棚にしまって遊びに出かけた。そのあいだに、母親はそのチョコレートを青い戸棚に移した。さて、遊びから帰ってきたマクシは、チョコレートがどの戸棚にあると思っているだろうか？

この問題に対し、おとなは「緑の戸棚」と答えるが、3～4歳ごろの子どもは、「青い戸棚にチョコレートがあると知っている」という自分の心の状態を、マクシにも当てはめて、「青い戸棚」と答えてしまう。

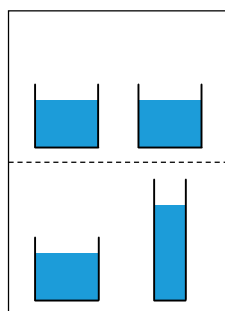
私たちは、他者の感情や考え、意図などの心的状態を推論する心の機能をもつ。これを心の理論という。おとなは、他者が自分とは異なる心の状態をもつことを理解しているが、3～4歳児の多くはそのことを理解できない。これは、マクシ課題のような、誤信念問題をあたえることで確かめることができる。

7～12歳ごろの具体的操作期では、具体的な事から論理的に考えることが可能になる。この時期には、対象の形が変わっても数や量は変わらないという保存の概念がいねんや、数学的な変換を行う能力を獲得する。

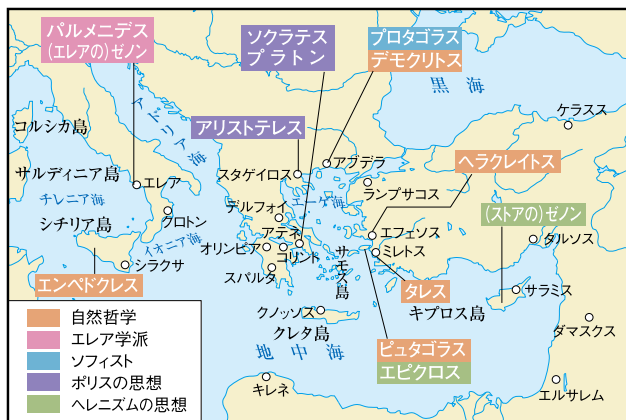
保存の概念

保存の概念を獲得していない子ども

は、見かけの長さや大きさととらわれた反応を示す。たとえば、同じ量の水を入れた、同じ大きさのコップを見せる。そのあと、ひとつのコップの水を、元のコップよりも細いものに移し替えて、どちらのほうに水が多く入っているかをたずねる。すると子どもは、水位が上がった、細いコップのほうが多いと答えてしまう。



その後、12歳ごろには、形式的操作期の段階に到達する。具体的な事だけでなく、想像上の現実や象徴的な概念を扱う、抽象的な思考が可能になる。「もしAであるなら、Bとなるだろう」というような、仮定にもとづく問題について考え、論理的に答えに到達することができるようになる。



▲ **タレス** イオニア地方の中心都市ミレトスの出身。天文学に通じ、紀元前585年の日食を予言したと伝えられる。

▲ 古代ギリシア世界とおもな思想家の出身地

自然哲学の祖**タレス**は、生成変化する自然の観察にもとづいて、「万物の根源は水である」と主張した。タレスは、あらゆる生物は水によって生きているという経験的事実から出発して、世界の根源を論理的に導き出そうとする。神話的な思考を超えた、学問的精神のはじまりである。以後、自然哲学は**ミレトス学派**とよばれる学者たちのあいだで発展してゆく。

その後、**ピュタゴラス**は宇宙の調和と秩序の根源を数であると考えた。ヘラクレイトスは「万物は流転する」と主張しながら、世界は、対立し合うもののあいだの調和と秩序をふくみ、燃えさかる火こそが万物の根源であると唱える。

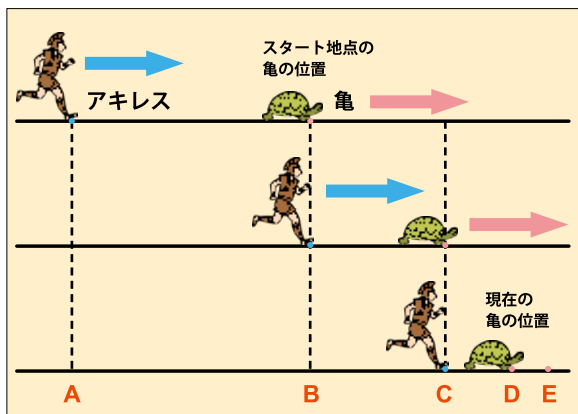
自然の生成変化とその秩序に注目するこうした考え方に対して、**エレア学派**の祖**パルメニデス**は、「在るものは在り、在らぬものは在らぬ」と主張した。唯一のものが存在する。存在する唯一のものは生成せず、消滅しない。変化や運動は、たんなる見せかけ（現象）なのである。パルメニデスのこの立場を、その弟子エレアのゼノンは「アキレスと亀」などの議論によって擁護したほか、変わらないものに注目するエレア学派の主張は、のちにプラトんに大きな影響をあたえることになった。

① ミレトス学派には、アルケーを、質的にも量的にも「無限なもの」（ト・アペイロン）と考えた**アナクシマンドロス**（Anaximandros, 610B.C.?～540B.C.?）や、永遠に循環しつづける「空気」であるとした**アナクシメネス**（Anaximenes, 546B.C.ごろ?）がいる。

② あらゆる事物は絶えず生成し、運動・変化するというヘラクレイトスの考え方を象徴することばである。

④ 「アキレスと亀」の議論

どれほど足の速い者でも、きわめて足が遅い者に追いつくことができない。あとから追いつこうとする者は、まず先行する者が存在していた場所に到達しなければならないが、その間に先行する者はほんの少し前にすすんでおり、以下同様であるからだ、とする議論。運動が論理的に矛盾をふくむことを説いて、運動はたんなる見せかけ（現象）であると主張するものである。



これに対し、あらためて自然の生成変化を説明しようと試み、自然を構成する要素（根）として土・水・火・空気を挙げたのがエンペドクレス、原子の集合と離散による万物の形成を説いたのがデモクリトスである。

2 知と徳をめぐる問い —— ソクラテス



5 **ソフィストの登場** 紀元前5世紀ごろ、哲学的思考は、自然（^{physis}ピュシス）ではなく人為（^{nomos}ノモス）、つまり法や社会制度を対象とするようになった。この大きな転換の背後にあるのは、ペルシア戦争後のアテネにおける、民主政治の成立である。市民が政治の担い手となり、家柄や財産にかかわらず政治的手腕（^{しゅわん}はつき）を発揮するためには、政治的知識（^{べんろんじゆつ}）や弁論術を身につけることが重視されるようになったのである。

10 こうした市民の要求にこたえて、^{sophistēs}ソフィスト（知者）とよばれる職業的教師たちが登場する。彼らは、ポリスを巡回しながら、報酬を得て弁論術や一般教養を教えた。その代表者は、^{Gorgias}プロタゴラスや^{Prōtagoras}ゴルギアスである。プロタゴラスは「人間は万物の尺度である」と主張した。個々の人間の判断があらゆるものの善悪と真理そのものを定める基準であって、万物をつらぬく普遍的な真理は存在しない。このような立場は^{そうたい}相対主義とよばれ、ゴルギアスらによってさらに^{てつてい}徹底されてゆくことになる。

20 このようにソフィストたちは、とくに道徳や法律、社会制度を人間の立場からとらえなおし、社会生活に自由な批判精神（^{どうじゆう}）を導入して、合理的な考え方を徹底させようと試みたのである。



アテネ出身の哲学者。父は石工、母は助産を生業としていたとされる。アテネ軍に三度にわたって従軍したとも伝えられる。自然哲学を研究し、人々との問答を通して、徳のある生き方と真の知を求めるようになった。著作はないが、彼の言行は、プラトンの著書『ソクラテスの弁明』『クリトン』や、クセノフォンの『ソクラテスの思い出』に記され、アリストファネスの喜劇『雲』では、むしろソフィストとして登場する。

アポロン神殿には「汝自身を知れ」という格言が刻まれている。ソクラテスは、自分にあてえられた神託と、この格言を結びつけながら、人間としてあるべき生き方は、無知を自覚し、無知であるからこそ知を愛し求めることにありと考えるようになったのであった。

- 5 この確信にもとづいて、ソクラテスは街頭に出る。広場（アゴラ）で多くの人々と問答を交わし、それを通して彼らを独断や思いこみから解放し、自分たちの無知を自覚させようとした。ソクラテスは、人々が無知の自覚から出発して、みずから普遍的な真理を求めること、その探究心がギリシア伝来の愛知の精神にまで深められることを願ったのである。

対話という手法

- 10 ソクラテスは、ソフィストたちのように、一方的に相手を説得しようとはしない。ソクラテスは、たとえば善や幸福について、まず相手が知っていると思っている事がらを語らせ、一問一答の対話をくり返すなかで、相手の主張にふくまれる矛盾を指摘し、相手がみずから訂正し、真の知の探究に向かうのを待った。自分が無知であるかの
- 15 ようにふるまうことで、反対に相手の無知をさらけ出させる、このようなやり方がエイロネイア（皮肉）とよばれる。

エイロネイアから出発しながら、ソクラテスは、対話（問答）をくり返すことによって相手に無知を自覚させ、思索を深めて真の知の探究へと旅立たせようとする。この方法が問答法（助産術）ともよばれる。

- 20 ソクラテスは、知は外から教えこまれることができず、ただ各人が自分で知を愛し求めてゆくことができるだけなのだと考えていた。助産術という命名によくあらわれているように、ソクラテスはひたすら、相手がみずから思索を深めてゆくのを手助けしていたのである。

Text 魂への配慮（プラトン『ソクラテスの弁明』）

わたしは、アテナイ人諸君よ、君たちに対して切実な愛情をいただいている。しかし君たちに服するよりは、むしろ神に服するだろう。すなわち、わたしの息のつづくかぎり、わたしにそれができるかぎり、けっして知を愛し求めることはやめないだろう。わたしは、いつだれに会っても、諸君に勧告し、言明することをやめないだろう。……世にもすぐれた人よ、君はアテナイという、知力においても武力においても最も評判の高い偉大な国都の人でありながら、ただお金をできるだけ多く自分のものになりたいというようなことにばかり気をつけていて、恥ずかしくはないのか。評判や地位のことは気にしても思慮や真実のことは気にかけず、魂（いのち）をできるだけすぐれたものにするということに気もつかわず心配もしていないとは。



▲ パルテノン神殿 アテネの守護神であるアテナ＝パルテノスが祀られ、聖域とされていた。

徳とは何か

人間にとって重要な真の知とは何か。ギリシア人たちは、あらゆるものにはそれぞれ固有の役割があると考えて、その役割を果たすのに要求される資質・能力をアレテー（優秀性・卓越性）とよんでいた。ソクラテスは、人間としてのアレテーは徳であって、それは人格・精神の卓越性であると主張する。

では、人間の徳とは何か。ソクラテスは、善美を理想としたギリシアの伝統をふまえ、徳とは魂（プシユケー）を可能なかぎりよいものとする（魂への配慮）であると考えて。ソクラテスにとって人間の魂の本質は理性であるから、魂への配慮とは、理性にその固有な機能を果たさせるように心がけることにほかならない。理性の機能とは真理を知ることであるから、魂をよくするとは、ソクラテスにあっては、真理を愛し求めることなのであった。

ソクラテスは、徳を認識し実現するものは、それ自身は知的なはたらきであると考えて。たとえば勇氣という徳を身につけるには、勇氣について知らなければならない。一般に、徳が何であるのかを知ることなく、徳を備えることはできない。その意味で「徳は知」なのであって、このような主知主義的な立場が知徳合一とよばれる。

真の知はかならず実践へと向かい、現実の行為と結びつく。もし悪をなすならば、それは真に徳について知らないからだ。勇氣について知っているとは、勇氣あるふるまいをすることなのである（知行合一）。人間にとっては、

④ 毒杯を手に、弟子たちに別れを告げるソクラテス（ダヴィッド画 ニューヨークメトロポリタン美術館蔵）ソクラテスは、死について、誰も死を経験したことがないのだから、死を恐れることは、知らないことを知っていると思うこと、すなわち「恥ずべき無知」であると語っている。



こうした徳を知り、それを身につけることが「よく生きる」ことであり、よく生きることこそが同時に幸福なのである（**福德一致**）。

人生への問い

こうしてソクラテスは、愛知の精神にもとづいて普遍的な真理を探究し、人間としてのあるべき姿を問題として、そのような営みのなかでポリスの基盤を再建しようとした。だが、ソクラテスの言動は、当時の人々の価値観や生き方に対するきびしい批判をふくんでいたため、多くの人々を敵にまわすことになる。

ペロポネソス戦争後のアテネでは、戦後処理をめぐるはげしい権力闘争が展開されていた。そうした状況のなかで、アテネの支配層に属する者が、ソクラテスを「国家の認める神々を認めず、新しい神を信じ、青年たちを腐敗・墮落させた者」として告発するにいたる。ソクラテスが告発者の政敵とかわりがあったからである。裁判でも、ソクラテスは自分の信念をつらぬき、死刑判決を受けた。刑の執行までに国外に亡命することをすすめる友人たちのことばを、ソクラテスは聞き入れない。

ソクラテスは、「ただ生きるのではなく、よく生きること」（プラトン『クリトン』）を生涯の目標としていた。よく生きることと正しく生きることはひとつであり、正しく生きることは法にしたがうことをふくんでいる。こうしてソクラテスは、ポリスの法にしたがいが、毒杯をあおいだ。

探究課題 2

- ① ソクラテスとそれ以前の哲学者を比較し、そのちがいを整理してみよう。
- ② ソクラテスはなぜ毒杯をあおいだのか、その死の意味を考えてみよう。



アリストテレス *Aristotelēs*

384B.C.~322B.C.

マケドニアの医家に生まれ、プラトンに学び、古代ギリシア哲学を集大成した。精緻な観察にもとづいた生物学的業績で知られるが、関心の広さから「万学の祖」とも称される。少年時代のアレクサンドロスを教育し、彼の即位とともにアテネにもどり、リュケイオンに学園を創設した。散歩しながら講義を行ったので「逍遙（ペリパトス）学派」とよばれる。講義録として『形而上学』『ニコマコス倫理学』『自然学』などが残された。

人間が人間とよばれるのは、人間には、固有なはたらきとして理性が存在するからである。したがって、アリストテレスにとって、理性の活動を完成することが最高の幸福であり、最高善となる。

人間の生活は、享樂的生活・政治的生活・観想（テオーリア）的生活の三つに分かれ、それぞれに快樂・名誉・知恵という善が対応する。アリストテレスによれば、観想的生活こそが「最善のもの（理性）がそれに固有な徳を備えて行う行動」として、もっとも望ましいものなのであった。

知性的徳と
習性的徳

さらにアリストテレスは、『ニコマコス倫理学』のなかで、人間の魂を理性的な領域と、感情・欲望の領域とに二分し、それに応じて、徳を知性的徳と習性的徳（倫理的徳）とに分類する。

知性的徳が観想的生活にそくした徳であり、教育や経験によって身につくものに対して、習性（エートス）的徳は、思慮という知性的徳に導かれながら、正しい行為のくり返しによる習慣づけを通じて身につく。感情・欲望と結びついた日常生活においては、過度と不足の両極端を避けて、その中庸を選び、そのくり返しによって習性的徳を形成してゆかなければならない。たとえば無謀（過度）と臆病（不足）の中間が、適度な勇氣なのである。たんなる知はまだ徳ではなく、習慣となったものこそが徳である、とアリストテレスは考える。

	過度	中庸	不足
平常心	無謀	勇氣	臆病
快樂	放縱	節制	無感覺
財貨	浪費	氣前の良さ	けち
怒り	怒りんぼ	穏和	意気地なし
ユーモア	道化	機知	野暮

▲ アリストテレスの挙げる過度・中庸・不足の例

① 知性的徳として、制作にかかわる技術（テクネー）、善悪にかかわる思慮（フロネーシス）、論証的な学知（エピステーメー）、直観的な知性（ヌース）、学知と知性をあわせもつ知恵（ソフィア）が挙げられる。

人間や世界のあり方の根本を深く考えようとするとき、対話というものは私たちにとって、きわめて重要な手法であり続けてきた。たとえば、ソクラテスの哲学がまさに対話によって紡がれていたという事実は、この点をとてもよくあらわしているといえるだろう。 5

ソクラテスが街頭で実践した問答法には、おおよそ次のような特徴がある。

- ①ある問題（幸福とは何か、善とは何か、など）について、相手がぼんやりと抱いているイメージを、主張として明確化させる。
- ②相手の主張を正面からは否定せず、代わりに、問答に関連する別の主張をいくつかとりあげ、相手の同意を求める。 10
- ③いま自分が同意したいいくつかの主張と、自分の元来の主張が整合していないということを、相手に気づかせる。
- ④その気づきを通して、相手が自分の主張の矛盾やゆきづまりをすすんで認め、問題についてあらためて自分で深く吟味していくように促す。

このように、ソクラテスが市井の人々と交わした対話は、たんに自分の主張を通すとか、相手を論破するといったことを目的とするのではなく、むしろ、相手の発することばをよく聴き、そのことばを発展させてゆくことが出発点となる。そして、相手が自分の考えの甘さや未熟さを自覚し、自分で新たな考えを生み出してゆく手助けとなることを目的にしている。それゆえ、ソクラテスの問答法は助産術ともよばれるのである。 20

対話とは、自己と他者の新しい思考の可能性をひらく創造的な営みである。ひとりで頭を悩ませている間はわからなかったのに、誰かに質問や相談をしていくなかで、「ああ、この問題はそういうことだったのか」と自分で気づいた経験はないだろうか。誰かに向けて話したり書いたりしていくなかで、自分では思いもよらなかったアイデアが出てきた経験はないだろうか。 25

「考えるとは、誰かに向かってゆくことのようなものだ」（『哲学探究』）。現代の哲学者ウィトゲンシュタインがこう語るように、私たちがことばで何ごとかを考えて意味するということの基本は、誰かに向かってゆくこと、誰かとともにすることなのである。

イエスの磔刑と

キリスト教の誕生

イエスは、アガペーのもとに

人間はみな平等であり、また

貧者や弱者こそが救われると主張した。人類愛の精神をかかげるイエスのこの教えは、ユダヤ教の律法主義者や祭司たちによって、彼らの権威を脅かすものと見なされた。彼らによって、イエスは、神を冒瀆し社会の秩序を乱すという理由で告発され、ローマに対する反逆者として、ゴルゴタの丘で十字架刑に処せられた。

だが、イエスは預言どおり、この刑死の三日後に復活して昇天したという信仰が、イエスの弟子たちのあいだに生まれた。やがてこの信仰は、イエスこそ神の子メシア（ギリシア語でキリスト）であるという信仰となり、ペテロを中心にイエスの教えを説く信徒の集団がつけられた。こうして、キリスト教が誕生したのである。



▲ イエスの死（エル＝グレコ画
マドリッド プラド美術館蔵）

5

10

15

3 世界宗教への展開



贖罪思想と

パウロ

キリスト教が異邦人のあいだにも広がってゆく糸口を開

いたのは、パウロ（もとの名はサウロ）である。

パリサイ派の律法主義者であったパウロは、キリスト教の信徒を迫害するためにダマスカスへ向かう途上、復活したイエスの声を聞くという宗教的体験を得て、神中心の生き方へと回心する。

パウロは、原罪にけがされた人類を救うために、神が神の子としてキリストをこの世におくり、十字架のイエスをいけにえとして、人類の罪をあがなった（贖罪）と考えた。

律法を行うことに熱心になることは、みずからに頼って、みずからを誇ることである。このような行いではなく、信仰によってのみ人は義とされる（信仰義認）。人は、キリストとともに「古き人」（「ローマ人への手紙」）と

20

25

① 神の言いつけにそむいたアダム以来、その子孫である人間が生まれながらに担っている根源的な罪。原罪ゆえに人間は根本的に悪であり、有限な存在であるとされる。

Text 贖罪思想（『新約聖書』）

すべての人は罪を犯したため、神の栄光を受けられなくなっており、彼らは^{あたい} 憫なしに、神の恵みにより、キリスト・イエスによる^{あがな} 贖いによって義とされるのである。神はこのキリストを立てて、その血による、信仰をもって受くべき贖いの^{てな} 供え物とされた。それは神の義を示すためであった。すなわち、今までに犯された罪を、神は忍耐をもって見のがしておられたが、それは、今の時に、神の義を示すためであった。（「ローマ人への手紙」第3章）



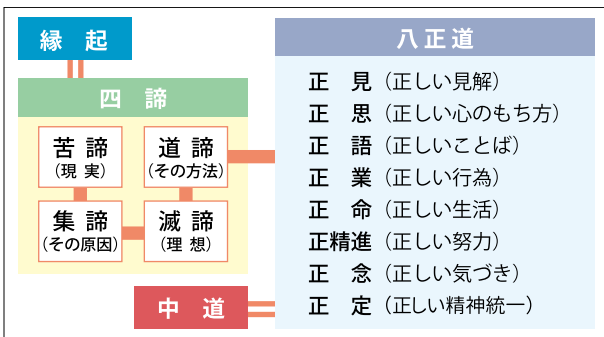
▶ **聖パウロの回心**（カラヴァッジョ画 ローマ サンタマリア-デル-ポポロ教会蔵）ダマスカスへの途上、パウロはイエスの声を聞いて落馬し、回心と^{しゅうめい} 召命とを同時に体験する。

しては死に、「新しく造られた者」（「コリント人への第二の手紙」）として、新しい精神状態において生きるのである。このことを、パウロは次のように説く。「もし、キリストがあなたがたの内におられるなら、からだは罪のゆえに死んでいても、^{れい} 霊は義のゆえに生きているのである」（「ローマ人への手紙」）。「生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしの内に生きておられるのである」（「ガラテア人への手紙」）。

以降、パウロはキリスト教の使徒として、「いつまでも存続するものは、信仰と希望と愛であり、このうちでもっとも大いなるものは、愛である」（「コリント人への第一の手紙」）と説きながら、異邦人への伝道に従事し、キリスト教が世界宗教として発展してゆく礎を築いた。

▶ **パウロの伝道** パウロは、小アジアやギリシアなど数回にわたる伝道旅行を行い、各地に教会を設立するなど、キリストの使徒として生涯をおくった。





▲ サールナート (初転法輪の地) ▲ 縁起と四諦, 八正道, 中道の関連

四諦・縁起の説

以上の内容を、仏陀はその最初の説法 (初転法輪) において説いたという。人生は苦であるという真理 (苦諦), 苦の原因は強い執着であるという真理 (集諦), 苦の消滅とは苦の原因である強い執着の消滅であるという真理 (滅諦), 苦の消滅にいたる正しい方法は八正道であるという真理 (道諦), これらをあわせて四諦 (四つの真理) とよぶ。

四諦の教えには、苦の原因および苦滅の原因が示されている。何ごととも原因によって生じ、原因によって滅するというところこそ、仏陀の悟りの内容であった。このことを縁起 (「縁って生起する」の意) という。

縁起の説によれば、あらゆる存在は、さまざまな原因が集まって、いま、仮にあらわれているものである。それらの原因自体も、さまざまな原因によってあらわれたものであるから、どの一瞬の原因も、前の一瞬とまったく同じではない。

したがって、あらゆる存在は、時とともに移り変わっていく (諸行無常)。いかえれば、あらゆる存在には、永遠・不変の実体がない (諸法無我)。ところが、ほんとうは実体がないのに、自己がある、自己の自由になるものがある、と思って暮らすのが人間である。そのため、望みはかなえられず、はじめ喜びであったものも、のちに失われて悲しみとなる。あらゆるものが苦をもたらす (一切皆苦)。しかし、この苦は超えられなければならない。また、超えることができる。煩惱の炎が吹き消された心は、真に静かな、安らぎの状態にある (涅槃寂静)。

「諸行無常」以下、四つの命題は、法すなわち教えの四つの旗印として、「四法印」とよばれる。

Text 仏陀のことは（『スッタニパータ』）

- 交わりをしたならば愛情が生ずる。愛情にしたがってこの苦しみが起る。愛情から禍いの生ずることを観察して、犀の角のようにただ独り歩め。
- 妻子も、父母も、財宝も穀物も、親族やそのほかあらゆる欲望までも、すべて捨てて、犀の角のようにただ独り歩め。
- あたかも、母が己が独り子を命を賭けても護るように、そのように一切の生きとし生けるものどもに対しても、無量の（慈しみの）ころを起すべし。
- 人々は「わがものである」と執着した物のために悲しむ。（自己の）所有しているものは常住ではないからである。この世のものはただ変滅するものである、と見て、在家にとどまっていたはならない。



涅槃像（インド クシナガラの涅槃堂）

生きとし生けるものへの慈しみ

仏陀は智慧と慈悲の二本足で立つといわれる。智慧とは悟りであり、慈悲とは他者をいつくしんで樂をあたえること（慈）、他者をあわれんで苦を抜くこと（悲）をいう。

生きものはすべて、輪廻の苦しみのなかにあるが、それは本来的な境涯ではない。何ものであれ、いつかは解脱し、究極的な安らぎを得るべき存在である。そのように見るところに、人間のみならず、生あるすべての存在（一切衆生）に対し、へだてなく同情・共感する態度が生まれる。

3 仏教とその後の展開



部派仏教の成立

仏陀はガンジス川中流域を遍歴しながら、弟子を指導し、人々に説法して、80年の生涯を終えた。

仏陀の教えを実践する人々、すなわち仏教教団は、出家修行者と在家信者から成る。出家修行者は、世俗の生活を離れ、きびしい教団規則にしたがって修行しつつ、在家信者を導く。在家信者は、出家修行者の衣食住の世話をする。在家信者になる条件は、仏・法（教え）・僧（教団）の三宝への帰依を誓うことである（三帰）。そのうえで、もし願うなら戒を受け、持つことができる。戒とは、悪をおさえ善をなす習慣を身につけようという誓いであり、もっとも基本的なものは五戒である。

① 五戒とは、不殺生戒（生きものを殺さない）、不偷盜戒（あたえられていない他人の物を取らない）、不邪淫戒（よこしまな性的関係をもたない）、不妄語戒（うそをつかない）、不飲酒戒（酒を飲まない）、の五つをいう。在家信者の場合、みずからの力のおよぶ範囲で、このうちひとつでも二つでも受け、持つことを誓う。



孔子

551B.C.?~479B.C.

魯国（山東省曲阜）の出身。姓は孔、名は丘、字は仲尼。宗教者階層の出身で、少年のころから葬祭の礼や呪術的な儀礼に親しみ、また古典を中心とする学問にはげんだと伝えられる。現実の社会を礼にもとづいて再建することを説き、諸国を遍歴するが容れられず、晩年は門人たちの教育に専念した。その言行は、彼の死後、門人たちによって編さんされた『論語』に伝えられている。

仁の思想

▶ 孔子

中国古来の血縁的秩序のなかに、他者への愛につらぬかれた円滑な共同社会を見だし、それを普遍的な人間関係の理法へと高めたのが、孔子の教え、すなわち儒教である。

孔子は、春秋時代の末期に魯の国に生まれた。孔子の母は、葬礼や招魂儀礼に携わった、「儒」とよばれる宗教者階層の一員だったともいわれる。彼は、礼にもとづく統治を完成させたといわれる聖人周公旦にあこがれて学問にはげみ、周の衰退とともに失われた礼の復興につとめた。

孔子の教えは、彼と門人たちの言行を集録した『論語』に伝えられている。孔子は、祭祀儀礼に深く通じていたと伝えられる。彼が力をこめて弟子たちに説いたのは、現実社会における礼の意義と、礼によって実現すべき人間の正しいあり方であった。この人間としてもっとも望ましいあり方を、孔子は、「仁」ということばで示した。

仁の根本は、ひとことでは、他者を愛することである。他者に対する親愛の情は、親子や兄弟のあいだの自然な情愛である「孝悌」にその基本的なあらわれを見ることができる（「孝悌なる者はそれ仁の本たるか」）。孔子は、孝悌を根底に、親愛の情をさまざまな人間関係に広めていくことが仁の実践であると考えた。いいかえれば、親愛の情によって、あらゆる人間関係が結ばれることを求めたのである。

孝にもとづく行い

儒教経典（『孝経』）の説く孝は、具体的な行いとしては、生きている親に仕えること、親や祖先の靈魂を祀ること、祭祀を絶やさないために子孫を繁栄させることからなる。このような生死を超えた孝のとりえ方は、中国の伝統的な祖先崇拜の観念に根ざしている。

Text 孔子のことは（『論語』）

- 子の曰わく、吾れ十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑わず。五十にして天命を知る。六十にして耳順がう。七十にして心の欲する所に従って、矩を踰えず。（「為政」）
- 子の曰わく、学んで思わざれば則ち罔し。思うて学ばざれば則ち殆うし。（「為政」）
- 子の曰わく、君子は義に驢り、小人は利に驢る。（「里仁」）
- 子、怪力乱神を語らず。（「述而」）
- 季路、鬼神に事えんことを問う。子の曰わく、未だ人に事うること能わず、焉んぞ能く鬼に事えん。曰わく、敢えて死を問う。曰わく、未だ生を知らず、焉んぞ死を知らん。（「先進」）
- 樊遲、仁を問う。子の曰わく、人を愛す。（「顔淵」）
- 子貢問うて曰わく、一言にして以て終身これを行なうべき者あるか。子の曰わく、それ恕か。己の欲せざる所、人に施すこと勿かれ。（「衛靈公」）



▲ 孔子廟大成殿

仁という心のあり方は、さらに「克己」「恕」「忠」「信」などのことばであらわされる。「克己」は自分の欲望やわがままをおさえること、「恕」は自分の望まないことを他者にもしないようにする思いやり、「忠」と「信」はそれぞれ自分を偽らず、他者をあざむかないことをいう。これらは、他者への愛情にもとづく点でひとつの仁に帰着する。

心のあり方としての仁を説いた孔子は、仁が行為として外面にあらわれたものが礼であるにとらえた。そして、いかなるときにも礼にはずれたふるまいをせず、「己れに克ちて礼に復る（克己復礼）」ことが、仁の実践であると説いた。

このような考えにもとづき、孔子は、形だけ礼にかなうあり方も、心で思うだけで礼としてあらわれない親愛の情も、ともに不十分であるとし、仁と礼をかね備えたあり方を人間の理想とした。

君子の徳

孔子は、仁と礼を身に備え、道を求めて不断に修養する者を君子とよび、君子を志すことのない者を小人とした。君子はつねに正しく生きること、すなわち義を志すが、小人はつねに利を求める。君子は心から他者に協力できるが、小人の協力はうわべだけである。また、君子は調和のとれた教養を身につけるべきであり、かたよりのない徳として中庸を備えるべきであると説いた。



啓蒙という課題と 批判哲学

啓蒙思想は、人間の理性の力によって、
根拠のない権威や狂信きやうしんを批判する。し
かし、その理性そのものは、どこまで信頼するに値するの
だろうか。啓蒙を徹底するには、まず理性の能力ざんみを吟味す
る必要があるのではないだろうか。

このように考えたドイツの哲学者カントは、人間の理性
が何をどこまで知りうるか、と問う。それを見定める「理
性批判」が、カントの哲学の課題にほかならない。このた
め、カントの哲学は**批判哲学（批判主義）**とよばれる。

また、カントはルソーの作品から人生観を揺るがす大きな衝撃を受け、ル
ソーから「人間を尊敬すること」を学んだと告白している。「理性批判」と
人間への尊敬が、カントの哲学の主要な二本の柱となる。

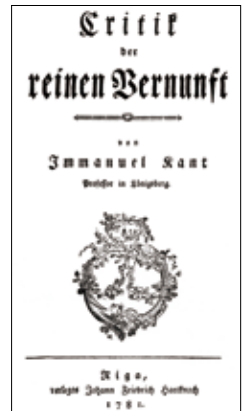
合理論から出発したカントは、ヒュームの著作を読み、とくに因果関係の
批判にふれたことで「独断どくだんのまどろみ」を破られ、人間の理性の限界に気づ
かされた。以降のカントは、経験論は理性のはたらきを過小に評価し、逆に
合理論は過大に評価していると主張して、理性批判すいこうを遂行した。

カントの主著『純粋理性批判』によれば、人間の認識の
範囲は経験に限定され、とらえ得る事物は「物自体」では
なく、私たちにそのようにあらわれる現象げんしやうである。認識と
は、対象である「物」（客観）をそのまま受け入れるので
なく、人間（主観）のはたらきにしたがって、「物」が現象
として構成されることである。すなわち、認識が対象に
したがうのではなく、対象が認識にしたがうのである。こ
うした認識のとらえ方の百八十度の転換を、**コペルニクス
的転回**という。

▶ 『純粋理性批判』の表紙



▶ カントのシルエット
(1793年 プットリヒ画)



① カントは、こうしたコペルニクスの転回を遂行しなければ、人間の理性は解決のできないアンチノミー（Antinomie、二律背反にりつはいはん）におちいると考えた。アンチノミーは、①世界には空間的・時間的な限界が存在するかどうか、②世界のすべてを単純な要素に分解できるかどうか、③「自由」はありうるかどうか、④「神」は存在するかどうか、の四つの問いについて生じる。

感性と悟性

対象を認識するためには、まず感覚があたえられなければならない。他方で、感覚を整理し、秩序づける枠組み（概念）も必要である。この枠組みを、カントは、経験に先立つア・プリオリなもの（より先なるもの）と考えた。カントはこのように、感覚を受容する**感性**と、概念を形成する**悟性**により、認識が成り立つとした。

5

カントは、人間には物そのものは認識できないと説いたが、その後のドイツでは、カントの哲学をふまえつつも、そうした制限をのりこえて、絶対的なものを認識しようとする哲学者たちがあらわれた。「自我」を哲学の絶対的原理とするフイヒテ、「自我」と「客観」の同一性を原理とするシェリング、そしてヘーゲルへといたる、ドイツ**観念論**の哲学者たちである。

J. G. Fichte ①
1762～1814

F. W. J. Schelling ②
1775～1854

10

義務と 自律としての自由

カントの人間尊重の精神は、その道徳哲学に表現されている。カントは『道徳形而上学の基礎づけ』の冒頭で、人間をふくむ理性的存在者の善い意志（善意志）をたたえて、「私達の住む世界はもとより、およそこの世界以外でも、無制限に善と見なされ得るものは、ただ善意志よりほかにはまったく考えることができない」と説く。たとえば、知力や体力があることは一般によいことであり、「自然の賜物」であるとされている。だが、カントはいう。「もし意志が善でないなら、折角の自然の賜物も甚だ悪性で有害なものになりかねない」。いかなる能力も用い方しだいでよくも悪くもなる。その善悪を決めるのは、意志のあり方なのである。

15

カントによれば、善意志とはある行為を、それが義務であるからという理由で行う意志である。行為を善いものとするのはその結果ではなく、義務であるから行うという動機なのである。このため、カントの立場は**動機主義**とよばれる。またカントによれば、自分の欲求のままに行動することは、自然の因果法則にしたがっているにすぎず、本当の意味で自由ではない。むしろ、自発的に義務にしたがうことこそが、自由であるとカントは考える。

20

25

① ドイツの哲学者。独自の哲学体系「知識学」を、『全知識学の基礎』などで展開し、ナポレオンの軍隊の占領下で『ドイツ国民に告ぐ』を発表した。

② ドイツの哲学者。主観と客観、精神と自然が同一であり、すべての事象が絶対者のあらわれであるとした。このような考え方はスピノザの汎神論の影響を受けたもので、自然観としては汎神論的自然観ともよばれる。著書に『超越論的観念論の体系』など。



現象学的還元と生活世界

▶ フッサール

実存主義は、20世紀のドイツやフランスにおいて、現象学げんしょうがくという学問を理論的な支えとして大きく発展した。現象学とは、さまざまな先入見はいを排して、事実の真の姿、「事象そのものへ」迫るための理論である。この現象学を創始したのは、ドイツの哲学者フッサールE. Husserl
1859～1938である。

フッサールによれば、人間の意識にはつねに、対象に向かい、世界を意味づけるというはたらきしこうせい（志向性）がある。現象としての世界は、このような意識の作用とのかかわりにおいて存在しているのである。しかし、私たちのふだんの態度（自然的態度）では、世界と意識とのあいだのそうした基本的な関係が反省されないままである。そこで、フッサールは、世界の存在についての判断をいったん停止し（エポケーEpoche）、意識と世界の本質的なかかわりを厳密にとらえなおす作業（現象学的還元かんげん）を試みた。

フッサールは、くり返し現象学的方法論を改良しようとしたが、最晩年には自然的態度の意義を見なおして、科学的に計量される手前の、日常的に経験される「生活世界」に、まず立ち返るべきことを説いた。こうしたフッサールの晩年の思想からとくに影響を受けたのは、のちにふれるメルロ
ポンティである。

死へとかわる存在

▶ ハイデガー

フッサールの教え子であったハイデガーは、現象学の方法論を用いて、古代ギリシア哲学以来の問いである「存在とは何か」という問題を、あらためて問いなおした。ハイデガーによれば、哲学とは、存在するとはどういうことか、を問うものである。

「存在とは何か」について、すぐさま答えられる人間は誰もいない。けれども、人間は少なくとも、そもそも何かが存在するとはどういうことか、と問うことができる。存在をそのように問うことができるあり方に注目して、ハイデガーは、人間をとくに「現存在げんぞんざい（ダーザイン）Dasein」と名づける。



フッサール

プロスニッツ生まれのユダヤ系哲学者。現象学を創始し、フライブルク大学教授に就任する。晩年はナチス政権たいくうに冷遇され、不遇に終わった。主著『イデーーン』

5

10

15

20

25



ドイツ西南部のバーデン州、メスキルヒに生まれる。フライブルク大学で神学を学ぶが、哲学に転じ、現象学に関心を寄せる。ギリシア哲学の理解において、パルメニデスに代表されるソクラテス以前の哲学者たちを重視した。フライブルク大学教授などを経て同大学総長に就任。ナチス政権へ積極的に協力したとして公職を追放され、復帰後は思索と執筆に専念した。主著『存在と時間』、他に『ヒューマニズムについて』など。

ハイデガーによれば、この現存在こそが、存在の問いへの通路である。現存在は日常的に、事物と、事物がかたちづくる世界にかかわり、世界のうちで他者と関係している。現存在とは、その意味でつねに「世界内存在」にほかならない。現存在は、世界の内に投げ出されGeworfenheit（被投性）、世界の内で、世界にかかわる。具体的にいえば、世界のなかのさまざまな対象（存在するもの。存在者）、つまり机いすや椅子などの個々の事物を利用し、他者を気づかい、配慮しながら存在している。

そうした日常的な生活のなかで、現存在はとりたてて「この私」という独自のあり方をしているわけではない。現存在は、日常的にはむしろ、誰でもよい誰かとして、あるいは誰でもない誰かとして存在している。ひとは誰も、誰もがそのように考えるように考え、ひとがそうするようにふるまい、みないふどがそう感じるように感じる。このかぎりでは、個人は、個性を欠いた世間の一員として生きているにすぎない。現存在の日常を彩るこのようなあり方を、ハイデガーは「ひとせじん（世人）」（das Manダスマン）とよんだ。ハイデガーによれば、それは非本来的なあり方である。

けれども、ひとは、誰でもない誰かとして日常を生きているとしても、死ぬことだけは別である。死ぬことを誰かに代わってもらうことはできず、ほかならぬ、この自分として死んでゆくほかはない。そのような自己の死から目をそむけないとき、現存在はむしろ「死へとかわる存在」として、置きお換えかようのない実存として自覚される。そのとき現存在は、自分の過去のあり方と未来の姿を、それぞれにかけがえのないものとして受けとめ、時間的存在である自己を自覚するのである。ハイデガーによれば、その自覚において、現存在の本来的な自己が獲得されることになる。



アーレント H. Arendt

1906~75

ドイツのリンデンでユダヤ系の家庭に生まれる。ハイデガーやヤスパーズの哲学の影響を受ける。ナチスがドイツを支配するとアメリカに亡命し、その後はアメリカを拠点に活動した。『イエルサレムのアイヒマン』ではユダヤ人虐殺の実行者アイヒマンの裁判を通して「悪の凡庸さ」(思考の欠如)を暴き、論争をよんだ。著書に『全体主義の起原』『人間の条件』など。

対話にもとづく公共性

▶アーレント

レーヴィットと同様に、教え子としてハイデガーから強い影響を受けながらも、独特な政治理論をつくりあげたのが、政治哲学者のアーレントである。

第二次世界大戦のあとにアーレントが取り組んだ最初の課題は、ナチズムに代表される全体主義の問題である。全体主義の危険を避けるためには、どのような政治のしくみを構想しなければならないか。これが、アーレントが政治をめぐって反省するときの、大きな導きの糸となる。

アーレントは、古代ギリシアの思想にさかのぼりつつ、人間と事物の関係としての「労働」^{labor}、道具や芸術作品などの人工物をつくりあげる「仕事」^{work}から、つねに複数の人間と人間のあいだの関係である「活動」^{action}を区別する。「活動」とは、ことばを仲立ち^{なかだ}にしてたがいに対話し合う行為であり、その「活動」によって公共性^{こうきょうせい}の領域^{りょういき}がかたちづくられる。ただ近代以降には、この「活動」の特殊性^{とくしゅ}が見失われ、「労働」の領域^{せんりょう}が公共性を占領してしまう傾向がある。

アーレントによれば、こうした傾向に対抗して、もう一度、ことばを交わし合う「対話」にもとづいた公共性の意味を再発見してゆくことが、匿名的な大衆の支配に基礎をおく全体主義の危険を避けながら、他者を尊重する民主主義を発展させてゆくうえで大切なのである。

道具的理性

▶フランクフルト学派

全体主義の台頭という問題を見すえながら、フランクフルト学派^{M. Horkheimer T. W. Adorno}に属するホルクハイマーとアドルノ^{1895 ~ 1973 1903 ~ 69}

は、共著『啓蒙の弁証法』^{けいもう}において、啓蒙的な思想や文化を批判する。

近代の理性主義は、科学技術を生み出し、文明の輝かしい進歩を約束した。また人間の意識を啓蒙して、理性にもとづく文化の構築をめざすとともに、不合理な抑圧状態^{よくあつ}から人間を解放し、合理的な社会をつくりあげようとした。

しかし、人間がみずからのために形成した合理的な社会は、人間による制御せいぎよをはるかに超えて巨大化してしまった。そのため、逆にその社会が人間自身を支配し、管理するという状況をもたらした。また合理的な文明による自然の支配は、かえって自然による人間の抑圧をもたらす。

- 5 このような啓蒙の展開のなかで、理性は人間と自然とを規格化し、技術的ぎかくに操作する道具的理性と化す。ホルクハイマーとアドルノは、こうした事態を理性主義の逆説ととらえ、現代社会に対する批判理論を展開した。

権威主義的パーソナリティ

フランクフルト学派から出発して、独自の社会心理学者となったE. Fromm 1900~80 フロムによれば、孤独と無力感に悩む個人は、むしろ自由を重荷と感じて、「自由からの逃走」とうそうを企てるようになる。ここにファシズムが大衆的な支持かくとくを獲得する基盤きばんが形成され、大衆のなかに、権威けんいに盲従する権威主義的パーソナリティが浸透しんとうすることになった。

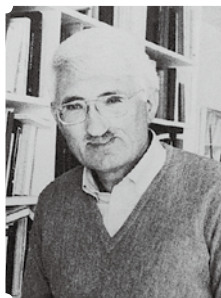
フランクフルト学派の主張は、近代の理性主義の限界を示すことで、現代において私たちが新しいタイプの理性もさくを模索する必要を訴えているのである。

対話的理性

▶ハーバーマス

15 そもそも私たちは、日常生活において、人間にとって根本的な規則をふくむ日常言語を使いながら、はじめから他者とのコミュニケーションのなかで生きている。こうした、ごく身近でありながらももっとも根源的な事がらが、往々にして忘れられがちであることによって、日常の世界のなかで他者をないがしろにする傾向が生まれる。

20 フランクフルト学派の立場から出発したハーバーマスは、他者との望ましいコミュニケーションを可能とする理性の新しいあり方を、「対話的理性」に求めている。



ハーバーマス J. Habermas

1929~

ドイツのデュッセルドルフに生まれる。ドイツ観念論やハイデガーの哲学を学ぶが、ホルクハイマー、アドルノらフランクフルト学派第一世代が主張した批判理論に大きな影響を受ける。やがて、第二世代を代表する社会学者として、「公共圏」「討議けん（ディスクール）」「理性」じくを軸に独自の思考を展開した。著書に『公共性の構造転換』『コミュニケーション的行為の理論』など。

望ましい社会のあり方
自由と平等をめくって

ロールズの考え方は、個人の自由と社会的な平等とを両立させようとするものであり、^{liberalism}リベラリズム（自由主義）に数え入れられる。ロールズの考えに対しては、個人の自由をより徹底^{てっぺい}させようとする立場と、個人の自由よりも共同体の価値観を重視しようとする立場から、それぞれ批判が向けられることになった。前者の立場を^{libertarianism}リバタリアニズム、後者の立場を^{communitarianism}コミュニタリアニズムという。

リバタリアニズムとは自由至上主義のことであり、何よりも自由を重要視し、平等や正義といった観点から自由主義に持ちこむべきではないと主張する。代表的な思想家である^{R. Nozick}ノー^{1938~2002}ジックは、主著『アナキー・国家・ユートピア』のなかで、ロックの想定した自然状態から出発して議論をすすめる、その存在が正当化されうる国家は、殺人、暴力^{りよくぬす}、盗み、詐欺^{さぎ}などからの人々の保護に役割が限定される、「最小国家」だけであると説く。これとは逆に、社会的な平等のために財産の再配分までをも行う「拡張国家」は、国家の本来の目的を逸脱^{いつだつ}しているというのである。

コミュニタリアニズムは共同体主義を意味し、リベラリズムが自由を重要視しすぎていることを批判し、共同体（コミュニティ）の価値をより重視すべきことを主張する。代表的な政治哲学者^{M. Sandel}サン^{1953~}デルは、ロールズらのリベラリズムで想定されている個人が、共同体の伝統や歴史を背景にもたない「^ふ負^か荷なき自己」であり、そうした個人は現実には存在しないと批判する。個人はつねに、家族や地域社会や民族といった共同体のなかに存在するのであり、各人は共同体のなかに「^い位置づけられた自己」にほかならない。サンデルは、共同体全体にとっての共通の善（^{ていき}共通善）の問題もあらためて提起している。

20世紀のさまざまな社会哲学は、古代ギリシアや近代ヨーロッパ哲学の発想を活用しながら、現代における望ましい社会のあり方を探るものであった。私たちも、これまで学んだ「正義」や「公正」についての思考をふまえつつ、よりよい社会のあり方について考え、対話を重ねてゆくことが大切である。



自由の女神像（1886年
ニューヨーク湾リバティ島）
女神の足元の壊れた足枷^{あしが}と
鎖^{くわ}は、アメリカの「自由」
と民主主義の象徴とされる。

5

10

15

20

25

30



分析哲学の登場 理性から言語へ

実存主義、構造主義、フランクフルト学派の思考は、大陸の合理論の伝統に対する自己反省でもあった。この流れとは別の仕方

→ p.121

→ p.139

→ p.130

で、近代の人間観や世界観を問いなおす立場に、おもにイギリスやアメリカでさかんな分析哲学がある。

分析哲学は、イギリスの経験論の伝統や論理学の発展などと深く結びついているが、その主要な特徴のひとつとして挙げられるのは、言語への着目である。分析哲学のなかには、私たちの言語的活動において使用されるさまざまな概念の分析や、そうした使用の背景にある論理の分析といったものに探究の軸足を置く議論が多く見られる。それゆえ、この種の分析哲学はしばしば言語哲学ともよばれる。そしてこの潮流には、哲学史上でも重要な、ある発想の転換がふくまれている。

近代哲学では、孤立した「私」(自我)こそが世界の一切をとらえる源泉だと見なす傾向が強く、各人のもつ理性、経験、意識といったものに、おもに関心が集まっていた。現代ではそれに対して、世界や自我のあり方をとらえるためにはむしろ、人間の生活に深く浸透している言語のあり方を理解しなければならぬと考える哲学者たちが出てきた。初期の分析哲学を主導した彼らの発想の転換は、言語論的転回とよばれている。

言語的活動の豊かさ

▶ ウィトゲンシュタイン

言語論的転回の代表的な担い手となった哲学者・論理学

者のひとりがウィトゲンシュタインである。彼は、最初の著書『論理哲学論考』において写像理論を唱え、客観的な世界のあり方を写し取る像としてはたらくことに言語の本質を求めた。そして、価値や倫理や信仰などをめぐる言説はそうした言語の本質から外れるものであり、実は言語で表現できる限界を超えてしまっていると考えた。このことを、彼は「語り得ないことについては沈黙しなければならない」ということばで表現している。

ただし、彼は後年、そうした若き日の自身の議論を自己批判し、むしろ、私たちが営む言語的活動の多様性や即興性といったものに着目するようになった。とりわけ彼は、言語を種々雑多なゲームとの類比によってとらえなおす「言語ゲーム」という考え方を提起した。



ウィットゲンシュタイン L. J. J. Wittgenstein

1889~1951

オーストリアのウィーンに生まれる。はじめ航空工学を学ぶが、のちに数学、論理学、哲学へと関心を移し、イギリスで研究に取り組む。第一次世界大戦には兵士として参加し、その間、前期の主著『論理哲学論考』を執筆する。この書の刊行後、一時は哲学から離れるが、やがて復帰し、後期的主著『哲学探究』などにおいて、前期のみずからの立場をのりこえる思考を展開した。

私たちは日々、ことばによって世界を写し取るだけではなく、あいさつを交わしたり、冗談しょうだんを言い合ったりするなど、じつにさまざまな種類の営み(ゲーム)を行っている。彼は、私たちがことばを用いてふだん行っている営みの、多彩で生成変化に富むその豊かさこそが、人間の生活や人間が住まう世界について考えるうえで根本的な重要性をもつことを指摘したのである。

5

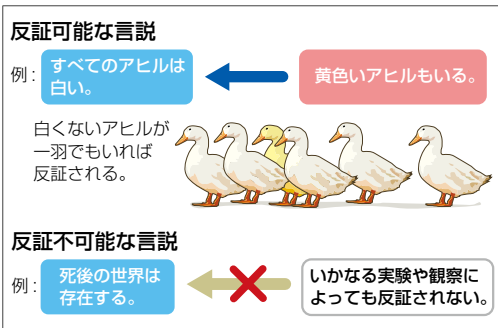
3 科学観の転換

科学哲学の潮流

現代では、とくに科学哲学とよばれる分野において、人間の言語的活動に着目する分析哲学の成果をふまえつつ、科学の方法それ自体についての反省的な考察がさかんに行われるようになった。そして、そこではしばしば、科学観の大幅な転換がはかられている。

10

ウィーン生まれの科学哲学者 K. R. Popper ほんしゅう ポパーは、反証主義とよばれる科学観を提示した。ポパーによれば、科学とは、私たちが世界のあり方について立てる一つひとつの言説が、実験や観察にもとづく経験的な検証によって反証されていく営みのことである



15

ポパーによる反証主義

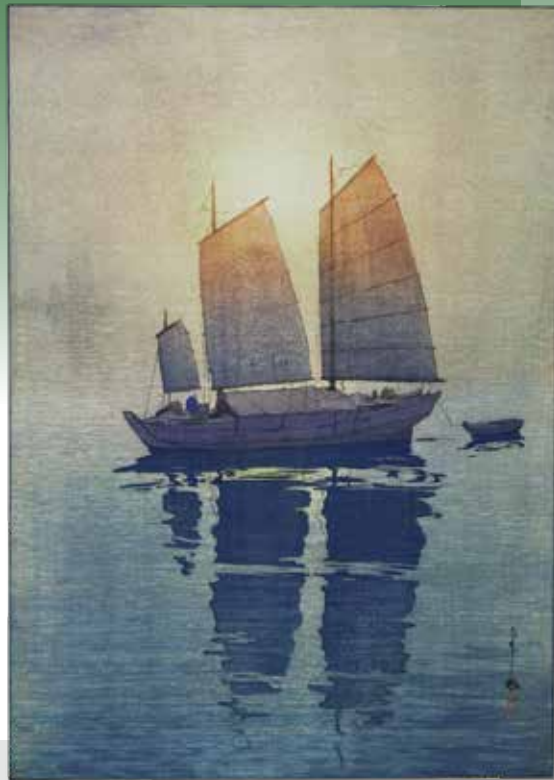
る。逆にいえば、いかなる実験や観察によっても反証される可能性をもたない言説は、科学理論の名に値しないということである。

20

アメリカの分析哲学者 W. V. O. Quine あたい クワインは、科学理論をはじめとする私たちの言説が、どのように確認されたり反証されたりするのかを問題にした。

第4編

国際社会に生きる
日本人としての自覚



「瀬戸内海集 ほんせいのうみ 帆船朝」
(吉田博 那珂川町馬頭広重美術館蔵)

1 古代仏教の思想



聖徳太子と
仏教思想

聖徳太子（厩戸皇子，厩戸王）の登場とともに、仏教思想がはじめて本格的に理解されるようになった。太子は

5 推古天皇の政治を輔佐し、大陸文化をとり入れながら、さまざまな改革に携わり、律令国家体制の基礎を築いた。

太子が制定したといわれる憲法十七条は、仏教と仏教よりやや早く伝来した儒教にもとづいて、官吏の心得を示したものである。その第一条は、政治を行う人々が重んじるべき理念として「和」をかかげている。

10 他の条でも、上下の者が親しみ合って議論せよ、自分の考えに異を唱える人に対しても腹を立ててはならない、自分より優れた人をねたんではならない、など和を重んじる姿勢が一貫している。

太子がこのように和を重んじた根底には、仏教的な人間観があった。人の目には優劣があるように見えたとしても、仏の目から見れば人はみな
15 「凡夫」（欲望にとらわれた無知の存在）である。誰も完全無欠でないのだから、大事を決するときには独断によらず、必ず議論をかけなければならない。時代や地域の別によらず、万人が頼りにできる拠りどころは、ただ三宝のみである。すなわち、仏・法（仏の教え）・僧（仏の教えを学び修する人々）であり、この究極の拠りどころを篤く敬うべきである、と太子は説いた。

Text 憲法十七条（『日本書紀』巻22）

一に曰く、和を以て貴しとなし、忤ふることなきを宗とせよ。人みな党あり、また達れる者少し。……

二に曰く、篤く三宝を敬へ。三宝は仏法僧なり。……

三に曰く、詔を承りては必ず謹め。君をば則ち天とす、臣をば則ち地とす。……

四に曰く、群卿百寮、礼を以て本とせよ。それ民を治むる本は、必ず礼にあり。……

六に曰く、悪を懲し善を勸むるは古の良典なり。これを以て、人の善をかくさず、悪を見ては必ず匡せ。……

十に曰く、忿を絶ち、臆を棄て、人の違ふを怒らざれ。人みな心あり、心おのおの執ることあり。……我れ必ずしも聖にあらず、彼れ必ずしも愚にあらず、共にこれ凡夫のみ。



螺鈿紫檀五絃琵琶（正倉院宝物）



京都出身。幼いうちに父母を失い、13歳で比叡山にのぼる。修行にはげむが満足せず、建仁寺にいたる。入宋後、如浄のもとで悟りを得て、日本曹洞宗の開祖となった。

帰国後、『正法眼蔵』の著述をはじめ。また越前（福井県）に移って永平寺を開き、坐禅と門人の指導につとめた。『正法眼蔵随聞記』は、弟子の懐奘がしるした道元の語録。主著に『正法眼蔵』、他に『永平広録』など。

禅における悟り

▶道元

末法思想や他力の信仰を批判して、坐禅ざぜんによる自力の救済を追究したのは道元どうげんである。坐禅とは、端座たんざして心を統一し、対象を観ずる修行である。その起源は古代インドのヨーガにあるが、宗派としての禅宗は中国において成立した。荣西えいせいが入宋して臨济宗りんぎしゅうを伝えて以来、さまざまな流派がもたらされた。

道元は比叡山に学び、のち建仁寺で荣西門下の明全めいぜんに師事し、ともに宋に入った。遍歴ののち、天童山てんどうざん（中国、浙江省）の如浄にょじょうのもとで修行し、悟りを得て曹洞宗そうとうしゅうを伝えた。

道元によれば、人々は本来、それぞれに悟りを備えた存在である。末法思想は、人々を教化する仮の手だてとして説かれたのであり、今生こんじょうの自己を見かぎり、ひたすら後生ごしゅうに期待するのは誤っている。ただし、悟りは人々が修行しなければはたらかず、あらわにならない。悟りを体得するためには、坐禅の修行が不可欠である。道元にとって、修行とは、ひたすら坐禅すること（只管打坐しかんたざ）であった。身も心もつくして坐りぬくとき、欲望など一切の束縛そくばくから解放されて、身心しんじんが自在の境地に達する（身心脱落しんじんだつらく）。悟りが生き生きとはたらいて、坐る人の目に映る景物は、存在の真実をあますところなくあらわし出し、目前の世界がそのまま悟りの世界となる。

「仏道（う）をならふ、といふは、自己なりをならふ也。自己をならふ、といふは、自己をわするなり」と道元はいう。仏道を修行するとは自己を修行することであり、自己を修行するとは自己を忘れることであり、そのとき、目前のあらゆるものによって、悟りの世界が開かれてくるのである。

① 備中（岡山県）に生まれ、比叡山で台密（天台宗の密教）を学んだ。幕府の帰依をうけて建仁寺を開き、天台・真言・禅三宗兼学とした。主著『興禅護国論』。

Text 悟りの世界 (道元『正法眼蔵』)

● 仏道をならふ、といふは、自己をならふ也。自己をならふ、といふは、自己をわするるなり。自己をわするる、といふは、万法に証せらるるなり。万法に証せらるる、といふは、自己の身心および他己の身心をして脱落せしむるなり。(『正法眼蔵』「現成公案」)

● それ、修証はひとつにあらざとおもへる、すなはち外道の見なり。仏法には、修証これ一等なり。いまも証上の修なるゆゑに、初心の辨道すなはち本証の全体なり。かるがゆゑに、修行の用心をさづくるにも、修のほか証をまつおもひなかれとをしふ、直指の本証なるがゆゑなるべし。すでに修の証なれば、証にきはなく、証の修なれば、修にはじめなし。(同上「辨道話」)

▶ 坐禅する僧の姿 (福井県 永平寺 大本山永平寺提供)



道元において、坐禅の修行は、悟りを体得するためのたんなる手段ではなかった。悟りは坐禅のうちののみあらわれ、坐禅はそのまま悟りの体得である。修行と悟りの体得(証)は、不二一体なのである(修証一等)。仏教の真髓(正法眼蔵)は、このような修証のうちにあり、と道元は信じた。

- 5 釈迦が見いだし、祖師たちが脈々と伝えてきた仏教の真髓を、いま如浄からたしかに受けついで(仏祖正伝)という信念のもとに、道元は門下の教育や主著『正法眼蔵』の述作に力をそそいだ。

法華経への信仰

▶ 日蓮

個人の救済を求めただけでなく、為政者に強くはたらきかけ、社会全体の救済を志したのは、日蓮である。日蓮

- 10 は比叡山で伝統的な『法華経』解釈を学んだのち、新たな『法華経』観をもって教えを体系化し、日蓮宗の開祖となった。

日蓮によれば、末法の世において、依るべき唯一の経典は『法華経』である。『法華経』こそ、釈迦の究極の教えであり、その題目には釈迦の備える功德(善行の成果)の全体がこめられている。

- 15 このように信じた日蓮は、心をつくして「南無妙法蓮華経」と唱えれば(唱題)、人はその功德を譲りあたえられ、誰でも仏となることができると説いた。そして、正しい教えである『法華経』が興隆すれば、災いが払われ、国土の安穩が実現するとして、『立正安国論』をあらわした。

死後も霊魂は消え去ることなく、^{かなた}彼方の他界におもむいたり、生まれ変わったりして存続するという考えは、古くは、洋の東西を問わず存在した。

『古事記』における黄泉よみや常世とこよは、山中や海上に想定された他界であった。

- 5 『出雲国風土記』によれば、とある海辺いその磯いそ（岸壁）に洞窟どうくつがあり、その奥にさらに穴があって、黄泉への入り口だと信じられた（出雲の郡宇賀こひろの郷かさと）。

平安時代初期の説話集『日本霊異記』には、輪廻転生りんねてんじゆうの話が収められている。ふとしたきっかけで自分の前生を知った人が、前生に暮らした家を訪ね、今生こんじゆうだけでなく、前生の親にも孝養きうようをつくしたという（上巻 第18話）。

- 10 浄土教の広がりとともに、さまざまな浄土教美術が盛行し、他界イメージも大きく変容した。「当麻曼荼羅たいままだら」^①は、説法する阿弥陀仏を中心に、楼閣や蓮池に集う無数の菩薩を描き、壮麗な浄土の景観を表現する。他方、庶民の他界観をよく示すのは「熊野観心十界図」（「熊野観心十界曼荼羅」）である。

- 図の上方の半円、向かって右から
15 左に、出生から死にいたる人の一生が描かれ、その先には閻魔王の庁（役所）が待ち受ける。さらにすすむと、六つの迷いの世界と四つの悟りの世界があり、どこに行くかはみずから
20 の心次第ということが、中央の「心」の字で示される。

➤「熊野観心十界曼荼羅」（金陵山西大寺所有 岡山県立博物館所蔵）中世末期以降、熊野比丘尼とよばれる女性の宗教者が諸国をめぐる、絵解きを行って広めた。迷いの世界とは、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天の六道。それぞれの世界の入り口を鳥居が示す。悟りの世界とは、声聞・縁覚・菩薩・仏の四聖道。「心」の字の周りに、雲に乗る仏と菩薩、僧形の声聞と縁覚が描かれている。



① 唐の善導の『観無量寿経疏』にもとづき、観想念仏を行うために描かれた。奈良（あるいは唐）時代にさかのぼる原本が伝わるほか、鎌倉時代以降、多くの転写本がつくられた。

1 近代的自我の成立と個人主義

文学における
自己の解放

明治初期における啓蒙思想家の活動は、人々に近代市民としての自覚を促した。明治中期になると、この自覚が

5 内面的に深まり、近代的自我へのめざめが生じてくる。

文学の世界では、西洋文学の影響のもと、ロマン(浪漫)主義の運動がおこり、自我の確立、感情の解放、因習との戦い、漂泊、彼方への憧れ、夢と幻滅など、さまざまな主題をめぐり、多彩な作品が生まれた。

10 北村透谷は、はじめ政治に志し、自由民権運動に加わったが、やがて文学の世界に身を投じた。透谷は、人間の自由な精神を「内部生命」とよび、文学の目的は、根本の生命である内部生命にふれ、それを表現することにある、とした(「内部生命論」)。いいかえれば、文学とは、目に見える「実世界」において、功利を追求する事業ではない。内面的な「想世界」において、真の美に到達し、絶対的なものと感応して、それを人々に伝えることこそ、文学という営みの本質である。透谷はこのように論じて、ロマン主義運動の先頭に立ったばかりでなく、近代的文学観の成立に大きく貢献した。

ロマン主義運動が、本格的な開花期を迎えるのは、明治30年代、とくに詩歌のジャンルにおいてである。

北村透谷	『文学界』創刊(1893)、「内部生命論」(同)
国木田独歩	『欺かざるの記』(1893~97)、『武蔵野』(1898)
島崎藤村	『若菜集』(1897)、『破戒』(1906)、『夜明け前』(1929~35)
与謝野晶子	『みだれ髪』(1901)、『君死にたまふことなかれ』(1904)
石川啄木	『あこがれ』(1905)、『時代閉塞の現状』(1913)
田山花袋	『蒲団』(1907)、『田舎教師』(1909)
永井荷風	『三田文学』創刊(1910)、『ふらんす物語』(1909)
武者小路実篤	『白樺』創刊(1910)、『新しき村』創設(1918)、『友情』(1919)
有島武郎	『或る女』(1911~19)、『生まれ出づる悩み』(1918)
志賀直哉	『和解』(1917)、『暗夜行路』(1921~37)
阿部次郎	『三太郎の日記』(1914~50)

◆ 明治・大正期のおもな文学者と作品(年次は刊行年)

Text 初恋(『若菜集』)

まだあげ初めし前髪の
林檎のもとに見えしとき
前にさしたる花櫛の
花ある君と思ひけり

やさしく白き手をのべて
林檎をわれにあたへしは
薄紅の秋の実に
人こひ初めしはじめなり

わがこゝろなきためいきの
その髪に毛にかゝるとき
たのしき恋の盃を
君が情に酌みしかな

林檎畑の樹の下に
おのづからなる細道は
誰が踏みそめしかたみぞと
問ひたまふこそこひしけれ

民俗学研究の広がり

▶ 南方熊楠

みなかたまくす
南方熊楠が
1867~1941

この時期には、さまざまな立場からの民俗学研究が開花した。そのひとりに、世界的な植物学者として知られる南方は、青年時代にアメリカ・イギリスに渡り、ほとんど独学で生物学や人類学を学んだ。帰国後、故郷和歌山県の山林で、菌類の採集・調査に従事する一方、独自の視座から民俗学研究をすすめた。

1906（明治39）年、全国の神社を一町村一社に整理する神社合祀令が出たとき、古い社やその境内の森林が破壊されることを憂い、反対運動をおこした。数年におよぶ南方の奮闘は、自然保護運動の先駆として評価されている。

あらゆる生きもの幸福

▶ 宮沢賢治

みやざわけんじ
1896~1933

日蓮宗の熱烈な信者であった宮沢賢治は、故郷岩手県の農村で、農業技術の専門家として献身的に活動しながら、科学的知識と仏教思想に彩られた独特の詩や童話をあらわした。

「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はありえない」（『農民芸術概論綱要』）。宮沢はそう述べて、『法華経』が説く菩薩のように、利他の行いにはげみたいと望んだ。現に生きものたちが受ける苦を見つめ、悲しみながらも、彼は希望をもって、理想的世界のありようを描いている。すなわち、どんな小さな生きものも差別されず、宇宙の大きなはたらきと一体化して、みずからの生命を全うすることのできる世界である。

科学的知識と宇宙の生命との結合をめざすその世界観は、今日問われている生命倫理の問題にも、豊かな示唆をあたえている。

主体性の確立

▶ 小林秀雄

かいぎ

昭和期に入ると、西洋近代思想の影響のもとに形成された自己のあり方に対する懐疑が提出されるようになった。

評論家の小林秀雄は、『様々な意匠』のなかで、新奇な思想や理論を、流行の意匠（デザイン）を追うようにもてはやす知識人の軽薄さを批判した。そして、芸術家の直観がとらえた生の手ごたえを、哲学的思索によってつかむことを試み、批評という新しい思想スタイルを創造した。私たち一人ひとりが真剣に生きているそのことのなかからくみあげられ、創造されるものだけが、真に主体的な思想の名に値すると考えたのである。



小林秀雄

昭和期の批評家。著書に『様々な意匠』『無常といふ事』『本居宣長』など。翻訳に『地獄の季節』（ランボー）など。



Text 無構造の伝統——「伝統」思想と「外来」思想 (丸山真男『日本の思想』)

私達の思考や発想の様式をいろいろな要素に分解し、それぞれの系譜を遡るならば、仏教的なもの、儒教的なもの、シャーマン的なもの、西欧的なもの——要するに私達の歴史にその足跡を印したあらゆる思想の断片に行き当るであろう。問題はそれらがみな雑然と同居し、相互の論理的な関係と占めるべき位置とが一向判然としていないところにある。そうした基本的な在り方の点では、いわゆる「伝統」思想も明治以後のヨーロッパ思想も、本質的なちがいは見出されない。近代日本が維新前までの思想的遺産をすてて「欧化」したことが繰り返し慨嘆される（そういう慨嘆もまた明治以後今日までステロタイプ化している）けれども、もし何百年の背景をもつ「伝統」思想が本当に遺産として伝統化していたならば、そのようにたわいもなく「欧化」の怒濤に呑みこまれることがどうして起りえたであろう。

敗戦と

抛りどころの喪失

第二次世界大戦の敗戦によって、明治以来、日本の近代化を支えてきた権威や価値観が崩れ去った。抛りどころが失われた崩解感覚^①に苦しみながら、人々は新たな価値観や秩序を模索した。小説家の坂口安吾^{1906~55}は、敗戦後の道徳的な頹廃を見つめて『墮落論』をあらわし、「墮ちる道を墮ちきる」ことにより、偽り飾ることのない自己に根ざした道徳を回復することを訴えた。

敗戦は、日本の近代化のあり方や戦前のさまざまな思想への反省を促す契機となった。マルクス主義など戦時中に弾圧された思想が復活し、多様な立場から国家や民族を問いなおす議論がおこった。政治学者の丸山真男^{1914~96}は、超国家主義を生み出した思想的な土壌には、新旧さまざまな異質な思想が、対決・整序を経ないまま、漫然と雑居している「無構造の伝統」があると指摘した。丸山は、戦前から取り組んでいた日本思想の研究を通して、民主主義を担う主体的な個人を確立する手がかりを模索し、『日本政治思想史研究』などをあらわした。



丸山真男

昭和期の政治学者。著書に『日本政治思想史研究』『日本の思想』、論文集に『現代政治の思想と行動』など。

① 自己が崩れ去っていく感覚に苦しむ復員学徒兵の内面を描いた野間宏(1915~91)の小説『崩解感覚』(「崩解」は作者の造語)に由来する。

また、詩人の吉本隆明<sup>よしもとたかあき
1924~2012</sup>は、戦時中の知識人の、状況に引きずられる思想的な弱さへの反省から、大衆の実生活のなかにはたらく思考をつかみとるところに、自立した個の基礎をすえることを説いた。吉本の思索はのちに、人間の生み出す共同^{けんどう}的な観念のあり方として個人・家族・国家の全体を問う『共同幻想論』へと発展した。

思想を ふり返る意義

戦後、日本国憲法のもと、平和を重んずる民主主義国家として出発した日本では、科学技術のめざましい発展と高度経済成長を経て、人々は豊かで便利な生活^{きょうじしゆ}を享受するようになった。

だが1990年代以降、社会構造が大きく変わり、経済的停滞^{ていたい}が長引くにつれて、非正規雇用の増大、所得格差の拡大、地方の衰退^{すいたい}、少子高齢化と人口減少など、隠れていた問題が表面化してきた。また近年では、地震や豪雨^{こうう}による大規模な災害の発生^①、感染症の流行^{→ p.222}など、予測することの困難な事態にも見舞われている。温暖化などの地球環境問題、グローバル化の進行とその反動など、国際社会が直面している諸課題に対しても、その解決に向けて、

私たち一人ひとりが考え、取り組んでゆくことが求められている。

私たちは、過去を背負い、未来を切り開く存在である。私たちのあり方や生き方には、過去の人々のあり方や生き方により、形成されてきた部分がある。また、私たちのあり方や生き方は、未来の人々に、どこかで影響をあたえずにはいない。過去の思想をふり返り、受けつぐべきよさや、克服すべき課題を自覚することは、現代を生きる私たちに課せられた責務といえよう。

探究課題 18

- ① この節で扱った思想家・文学者のいずれかの作品にふれ、そこでどんなことが問われ、何が主張されているのか、考えてみよう。
- ② 古来の日本人の心情や思想は、私たち自身のあり方にどのような影響をあたえているだろうか。共感する点や反発を感じる点、よさや問題点について、話し合ってみよう。

① 2011年3月11日、東日本大震災が発生した際には、地震と津波で機能を失った福島第一原子力発電所から放射性物質が大量に放出され、土壌や海洋を広範囲に汚染して、甚大な被害をあたえている。

自然や科学技術をめぐる諸課題



◀ **谷津干潟と水鳥**（千葉県習志野市）谷津干潟は、1993年にラムサール条約湿地として登録された。ラムサール条約とは「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」のことで、湿地の生態系保全を目的としている。

1 環境と倫理



変わりゆく自然観

私たち人間は、自然のなかで、その一部として生きる存在である。古来人々は、私たちがそこから生まれ、そこへと帰っていく大いなる自然を深く畏れ、敬ってきた。また、私たちはしばしば、自然の形象や、自然に内在する調和と秩序に、美や技術の理想を見いだしてきた。何かものをつくり出すとき、私たちは基本的に自然を範とし、自然を模倣してきたのである。

しかし、私たちの自然に対する見方は、科学技術の発達とともに大きく変化してきている。近代以降、自然は畏敬の対象であるというよりは、むしろ、法則の把握と応用を通して人間が支配し、利用すべき対象と見なされるようになった。人間はみずからの目的に合わせて自然のあり方を大きく改変するようになり、現代では、地球環境や生態系に甚大な影響が生じている。

問いなおされる

人間のあり方

だが、私たち人間は、本当に自然の支配者となったのだろうか。たしかに、私たちは自然の脅威に対し、かつてのように無力ではない。科学技術によって、災害や感染症などのリスクを、ある程度は低減させることが可能になった。しかし、リスクをゼロにできているわけではまったくない。また、そもそも私たちの生が、死をはじめとする自然の制約を受けているという根本的なあり方に変わりはない。

科学技術そのものもまた、自然の内であって、自然の支配を受ける事象のひとつである。たとえば蒸気機関は、蒸気の圧力や往復運動、回転運動などの物理現象を組み合わせてつくられている。そのように、科学技術は自然界におこる現象を再現したり組み合わせたりして利用する技術であって、そもそも自然現象そのものを生み出す技術ではないのである。

人間は、自然から離れては生きられない。一方で、人間はただ自然に埋没する存在でもない。科学技術が急速に発達している今日だからこそ、私たちには、自然とどうかかわりつつ生きるべきかという、人間としてのあり方の根本を問いなおすことが求められている。



▲ プロメテウスの火 ギリシア神話では、天上界から火を盗み出したプロメテウスによって、人間は火をあたえられる。火は、道具の製作にはじまる人間の「技術」の根源となった。

環境倫理の登場

私たち人間とのかかわりにおいてとらえられた自然を、自然環境あるいはたんに環境とよぶことができる。環境とは私たちが自分の生命を実現してゆく場であり、和辻哲郎がいうように、とくに風土としての環境は、人間の生活や習慣、文化によって形成されてきたものである。たとえば寒さという気候現象も、寒暖計で測定されるただの自然現象ではない。衣服を着、暖房を入れ、燃料や衣服を得るために労働することのすべてが、寒さについての私たちの経験そのものなのである（『風土』）。けれども皮肉なことに、現在では、そのように快適な環境を手に入れようとする人間の努力そのものが、環境を破壊する可能性も指摘されている。たとえば、冷暖房の過剰な使用は環境を汚染し、地球温暖化をまねく要因のひとつであるといわれる。科学技術の恩恵によって、自然にかかわり、自然を私たちにあってより快適な環境に変えてゆこうとする営みについて、その限界が指摘されつつある。これは、自然から絶えまなく恵みを受けとらなければ存続できない私たち人間にとって、きわめて重大な問題である。

ここからは、環境倫理^①とよばれる議論を中心に、人間と自然のかかわりをめぐる問題を考えてゆくことにしよう。

① 環境倫理の議論の背景には、公害、資源の減少、国境を越えた環境汚染、砂漠化の進行、酸性雨、地球温暖化など、地球環境の危機（地球環境問題）が指摘されている現代の状況がある。

▷ アイヌ古式舞踊
 (2020年 北海道白老町) アイヌ民族の信仰に根ざした芸能。祭りや家庭の行事の際に踊られ、アイヌの人々に継承されている。2009年、ユネスコの無形文化遺産に登録された。



1 文化や宗教の多様性と倫理

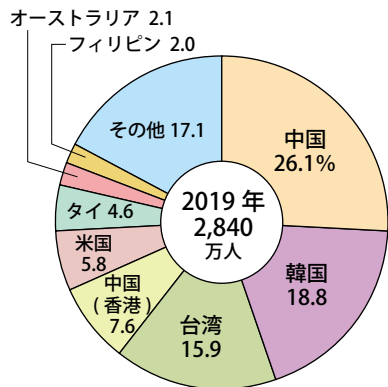
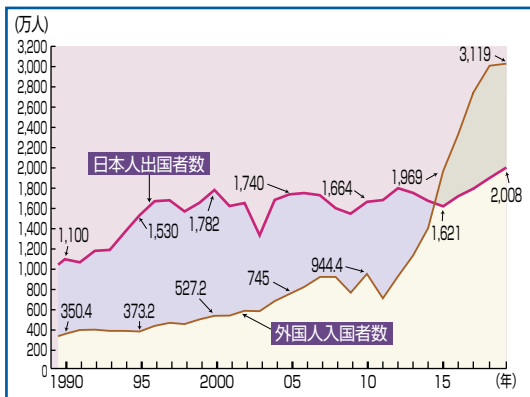
文化と社会の多様性

人々が一定のまとまりをなして生活しているところには、その成員が共有する生活の知恵や様式の体系、すな

5 わち文化がある。地域のまとまりには、それに対応する地域文化があり、民族にはそれぞれ固有の民族文化がある。たとえば、文化的要素のひとつである言語を、民族を数える尺度としてみると、世界に、5,000 から 8,000 あるといわれる言語にほぼ見合った数の民族があり、その文化があることになる。

10 民族を超えて伝播する普遍的性格があるため、数はこれほどではないが、聖なる価値を中心にして人々の生き方を律するものである宗教の多様性にも注目しなければならない。世界には、先に学んだキリスト教・イスラーム教・仏教のほか、ユダヤ教、ヒンドゥー教、そしてアフリカ、南北アメリカ、オセアニアの先住民の諸宗教的伝統、その他民族宗教や民間信仰などの多様な宗教が、人々の祈りの心から求められ、人々の生を支えている。

15 言語や民族、宗教の多様性は、そのまま人間の多様性でもある。それらは既存の国家の枠組みには収まりきらず、世界のほとんどの国家は、内部に複数の言語・民族・宗教を抱える多言語・多民族・多宗教国家である。日本も、その例外ではない。今日、日本の社会には複数の民族が居住し、その民族固有の文化が、そして宗教が存在している。



外国人入国者数, 日本人出国者数の推移 (2020年 法務省調べ) 日本にはじめて入国した外国人の国・地域別割合 (2020年 法務省調べ)

ヒトやモノや情報が国境を越えて大量に行き交うグローバル化 (globalization リゼーション) の時代にあつて、異なる文化あるいは宗教どうしが接触する機会は、かつてないほど頻繁になってきている (多文化・宗教状況)。それにともない、異なる文化や宗教への無理解から生じる緊張や葛藤 (文化・宗教摩擦) も、しばしば問題となっている。これらは、ときに民族間、宗教間の対立をまねき、深刻な紛争を生じさせる要因ともなる。私たちが、これからの社会で生きるためには、広い視野から異なる文化や宗教の存在を認め、それらを理解しようとする努力が必要不可欠である。

多元主義の倫理

人はみな、自分の生まれ育つた文化のなかで、常識や価値観を身につけてゆく。さまざまな文化は、そのなかで

生きる人々のかけがえのない生をかたちづくっている。自己を形成した文化が自明のものであるのに対し、異なる文化は、しばしば不可解で常識にはずれたものと感じられる。異なる文化にふれたときの衝撃 (カルチャー・ショック) が、相手への差別や偏見を生みがちなのは、そのためである。

自分の身についた民族文化を無意識のうちに絶対視し、自己中心的な尺度で異文化をとらえようとする見方を、自民族中心主義 (エスノセントリズム) という。この見方の弊害は、自分たちの文化を受け入れる者を認め、そうでない者を差別・排除する同化主義を生むことである。

① たとえば、パレスチナ生まれの思想家・文芸評論家サイード (E. Said, 1935 ~ 2003) は、一見、客観的な見方と思われている東洋・西洋という区別も、じつは西洋近代中心の東洋のとらえ方 (オリエンタリズム) がつくりあげたのもであると主張した。

多様性の尊重と 共生

世界中に数多くの宗教や文化が存在することは、人々の生き方や価値観が多様であることを示している。人間の多様性は文化や宗教にはとどまらない。同じ文化や宗教に属していても、人々のあいだでは、世代、性、障害の有無などにさまざまな差異がある。こうしたちがいがいにもとづく偏見や差別も、克服しなければならない課題である。

5

性的少数者への配慮

性にかんする偏見や差別について、従来は、男女の平等や女性の地位向上が主要な問題であった。LGBT^①という考え方に見られるように、近年では、男女という二分法にとらわれない性のあり方も認めて尊重しようという声が挙がっている。こうした声に対しては、伝統的な性のあり方を守ろうとする主張がある一方で、セクシャル・マイノリティ（性的少数者）への配慮と権利の擁護をめざす取り組みも増えている。

10

民族、宗教、世代、性のあり方などが異なる者が、たがいを拒絶したり他者を顧みなくなれば、社会は分断されてしまう。集団としてのまとまりを強化するために、構成員に特定の生き方や価値観を強制すれば、弱者や少数者をふくむ多くの人々にとって、その集団は息苦しいものとなる。人々の多様化がすすむ現代では、同化を強制するのではなく、ちがう者どうしがたがいに差異を承認しあい、対等な立場で共生する社会をめざさなければならない。

15

他者とともによりよく生きる共生の道を探究するのが、倫理の問いである。私たちが築きあげてきた、他者に開かれた共生の倫理が、いま、真価を問われているといえるだろう。日本文化の伝統の知恵をも活かしつつ、人類社会の安寧に貢献することが、私たちには求められている。

20

探究課題 22

- ① 近年では、国や地域によって異なるが、セクシャル・マイノリティ（性的少数者）の権利を擁護するさまざまな取り組みが行われている。二つ以上の国を選び、どのような取り組みが行われているか、その背景にはどのような思想や文化があるのか、調べてみよう。

25

① Lはレズビアン（心の性が女性で恋愛対象も女性）、Gはゲイ（心の性が男性で恋愛対象も男性）、Bはバイセクシャル（恋愛対象が女性にも男性にも向いている）、Tはトランスジェンダー（身体の性と心の性が一致しない）をさす。LGBTQなど、より細分化された分類法もある。